形　式：皮膚がん

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚扁平上皮癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Perineural spread of cutaneous squamous and basal cell carcinoma: CT and MR detection and its impact on patient management and prognosis.	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（　1　）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	SCC-CQ2-7, WEB-CQ2-2	
書誌情報	エビデンスの レベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1 つ以上のランダム化比較試験による Ⅲ. 非ランダム化比較試験による Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （　Ⅳ　）	
	Pubmed ID	11240248	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Int J Radiat Oncol Biol Phys	
	雑誌 ID		
	巻	49	
	号	4	
	ページ	1061-9	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　（　1　）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　（　2　）	
	発行年月	2001	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Williams, L. S.	Department of Radiology, University of Florida, Gainesville, FL 32610-0374, USA.
	その他著者 1	Mancuso, A. A.	同
	その他著者 2	Mendenhall, W. M.	同「
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の８項目	目的	CT、MRI による神経浸潤の術前診断と予後との関係を明らかにする	
	研究デザイン	コホート研究	
	セッティング	フロリダ大学	
	対象者	35 例の顔面、頭部 SCC あるいは BCC 患者（臨床的あるいは組織学的に神経浸潤が証明されている）	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず　（　3　）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず　（　3　）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず　（　22　）	
	介入（要因曝露）	SCC 原発巣における神経浸潤の有無	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	5 年生存率	1.主要 2.副次 3.その他（　1　）
	2		1.主要 2.副次 3.その他（　　）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（　　）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（　　）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（　　）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（　　）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（　　）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（　　）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（　　）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（　　）
	主な結果	術前 CT、MRI による神経浸潤の診断の有無と予後との関係を調べた。全ての症例において広範囲切除か Mohs を行い、さらに術後放射線療法を併用している。35 例中 18 例が画像で神経浸潤を同定できた。術前の画像検査で神経浸潤有群：無群における 5 年後の局所再発率は 78%：35%、5 年生存率は 86%：50% (p = 0.048)であった。	
	結論	術前 CT、MRI による神経浸潤の発見は、予後不良のサインであり、術後補助療法の検討をすべきである。また、極小の浸潤に比べて大型の神経浸潤がある場合は予後が不良である。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	宇原　久	

	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（　IV　） 貴重なデータを含んでいるが解析が十分ではなく、SCC と BCC を一緒にしている点も含め、全体に読みにくい（論文からデータを拾うと SCC は 29 例、BCC は 6 例である）。また、全ての症例に術後放射線療法を行っているにも関わらず予後に差があるということは、術後放射線療法の有効性に問題があることを示している可能性があり、著者らの結論に疑問を感じる。なお、異常感覚や痛みなどの自覚症状がある場合の画像検査による神経浸潤陽性率は 67％（SCC のみでは 70％：レビューワーの計算）、症状の無いものは 18％（SCC のみでは 18％：レビューワーの計算）であり、画像検査の選択を行う上で興味深いデータである（ただし、自覚症状の有無と予後との関連は統計学的に認められなかった）。